

## 迅速 PCR 検査導入前後におけるブドウ球菌菌血症患者に対する使用抗菌薬の変化

◎嘉瀬 文孝<sup>1)</sup>、河合 由佳<sup>1)</sup>、原口 摩耶<sup>1)</sup>、古藤 柚子<sup>1)</sup>、大内 和真<sup>1)</sup>  
大森赤十字病院 検査部<sup>1)</sup>

### 背景

昨今、全自動遺伝子解析装置の普及に伴い、マンパワーの少ない中小規模の市中病院においても遺伝子検査の実施が可能となってきた。当院においても GeneXpert システム(ベックマンコールター)の導入を機に Xpert MRSA/SA BC の運用を開始した。本検討では遺伝子検査導入前後におけるブドウ球菌による菌血症患者に対する使用抗菌薬の変化を調査したので報告をする。

### 対象および方法

遺伝子検査導入前の 2020 年 4 月～2021 年 3 月と遺伝子検査導入後の 2021 年 12 月～2023 年 3 月において、血液培養 2 セット以上採取している患者のうち *Staphylococcus* 属が複数セットから検出された 83 症例(導入前 n=35、導入後 n=48)を対象とした。なお、この対象となる症例はすべてコンタミ疑いを除いたものとした。検討方法は導入前後の対象となる症例において①血培陽性報告時(導入前はグラム染色のみ報告 導入後はグラム染色+遺伝子検査の報告)②同定感受性結果報告後の各段階で使用抗菌薬の変化を比較した。

### 結果

- ①血培陽性報告後において、抗菌薬の変更率は 51.4%  
→45.8%( $p=0.66$ )で有意差は認められなかったが、不適抗菌薬の使用率は導入前後で 28.6%→6.3%( $p=0.01$ )で有意に低下した。
- ②同定感受性結果報告後において、escalation 率は 42.9%  
→10.0%( $p=0.11$ )で有意差は認められなかったが、抗菌薬の変更率は導入前後で 60.0%→20.8%( $p<0.001$ )で有意に低下した。

### 考察

遺伝子検査導入前後の比較から、血培陽性報告時の段階で遺伝子検査の結果を参考に適切な抗菌薬が選択されており、同定感受性結果報告後は血培陽性報告時点で選択した抗菌薬を変更せず治療を行うようになったことが確認された。つまり、遺伝子検査導入後は、より早期の段階で適切な抗菌薬による治療を行っていることが考えられる。よって、抗菌薬の観点から評価した場合、遺伝子検査は抗菌薬適正使用への一助となっていることが示唆された。

連絡先:大森赤十字病院 03-3775-3111(内線 5855)